玄奘三蔵会大祭

　いきなりの寿ショットのハプニング。朝礼の時に出会った、休ケ岡八幡宮の森の中での結婚式。世界遺産・薬師寺さんの守り神で挙式なんて、頑張ってるじゃないですか。
　この二人、新婚旅行は世界遺産巡りだったりして、――えっ？、マヤ文明の古代都市・テオティワカンへ行きたいって？、奥さんが？、そりゃ、まあ、世界遺産には違いないけど、メキシコだぜ、豚インフルだぜ、そんな処へ行ってごらんなさい、両家の親戚一同から総スカンを食って離婚騒動になりかねない。
「分かってるわよ、だから国内の世界遺産にしたら文句ないんでしょ」
　そう、東大寺とか、法隆寺とか、なんだったら彦根城だって近鉄電車一本で……、というわけにはいかないけど、でもこのご夫婦、どうも奥さんのほうが強そうです。そういえば、休ケ岡八幡のご祭神は、あの三韓征伐で古代史に勇名を馳せた神后皇后、奥さんのほうが強いに決まってましたね。

「中尊の薬師如来さんはお医者さんで、脇侍の日光菩薩さんと月光菩薩さんは看護士さんなんです。それで、薬師如来さんの本名は―――」
　トーホウ・ジョールリ・ジョード・ヤクシ・ルリコウ・ニョライ。しっかり覚えましたよ。漢字で書くと　「東方浄瑠璃浄土薬師瑠璃光如来」。
　再建なった煌びやかな金堂で、名古屋大出の案内役のお坊さんの説明を聞きながら、何回も、口の中で唱えてみると、僕なんか昨日の競馬の負けも忘れてしまって、心の中がスカッと明るくなってくるようなーー、
「私たちがみんな持ってる心の病い、奢り、怒り、妬みから、私たちを救ってくださるんです」
　なるほど、それで奢りの化身が猪八戒、怒りの化身が孫悟空、妬みの化身が沙 悟浄で――。あれ、突然西遊記で、夏目雅子さんの三蔵法師が出てきたりして、若く見えるけど、けっこう僕達と同世代じゃないですか。でも、僕は新派の大女優、水谷八重子さんの玄奘三蔵を拝見しましたよ。それもここ、薬師寺さんで、五年ほど前ですが、「玄奘三蔵会大祭」で拝見したんです。

　毎年、５月５日に薬師寺の三蔵院で、玄奘三蔵を顕彰する「玄奘三蔵会大祭」の法要が盛大に開かれます。玄奘三蔵は法相宗の大本山である薬師寺の始祖にあたるんです。
　大祭の当日は、薬師寺住職の法話とか、多納経者への輪袈裟、肩衣の贈呈とか、夕方からは万灯会といった、寺廟に相応しい行事が行われますが、その中で玄奘三蔵の物語を題材にした伎楽の奉納があるんです。

　そこで、「伎楽」です。「ぎがく」と読みます。
　『伎楽は、日本最古の芸能で、日本書紀によれば、612 年、推古天皇の時代に百済人味摩之（みまし）によって中国南部の呉から伝えられたというが、そのル

ーツについては中国南部、西域、ギリシャ、インド、インドシナなど諸説ある。聖徳太子の奨励などによって、伎楽は寺院楽としてその地位を高め、東大寺の大仏開眼供養（西暦 752 年/天平勝宝 4 年）の時には、大規模に上演された。その時、用いられたと思われる伎楽面が残されている』

どこにあるかというと、正倉院です。それも１７０面余り。ゴロゴロあるといっていい。僕は何年か前に正倉院展で見たことがありますが、異様な顔立ちです。高い鼻と窪んだ眼、あるいは唐三彩の美人のようなふっからした顔立ち、それらはみんな当時の中国や、西方のシルクロードやペルシャの人々を思わせます。

『伎楽は、行道という一種のパレードで始まる。これは読経を伴い、仏を賛美するものと考えられ、次に笛、鼓などの楽器と、音声という声楽のパート、さらに獅子、踊物、後奏の楽隊、帽冠（ほうこ）とよばれる僧がつき従う……。

一行が、演技の場に到着すると、獅子舞がはじまる。これは演技の場を踏み鎮める役割をはたす。次に呉王、金剛、迦楼羅（かるら）、呉女、崑崙（こんろん）、力士、波羅門、大孤王、酔胡王という登場人物によって無言劇が展開される』

劇は打楽器や管楽器の伴奏による、大らかな一種の滑稽劇だったようです。例えば崑崙というのは悪者の役で、呉女に卑猥な動作で言い寄り力士に懲らしめられたり、西域の王の酔胡王は酔っ払って、獅子の尾を踏んづけて怒らせてしまったり、そんな劇です。嫁と姑の対決、あるいは妻と妾の争いといったような、女性好みの恐ろしい話は登場しない。ですから、聖武天皇の横で、光明皇后なんかは生欠伸をかみ殺していたかもしれませんね。

『奈良時代にさかんに行われていた伎楽も、平安時代を経て鎌倉時代になると次第に上演されなくなった。しかし現在でも「獅子舞」や、各地の寺院で行われる「お練供養」にその痕跡をとどめている。また近年では 1980 年代ごろから「新伎楽」という形での復興が行われ、奈良の寺院などで上演されている』

そのひとつが、薬師寺の「玄奘三蔵会大祭」で上演される伎楽というわけです。

登場人物は三蔵法師と伎楽のキャラクタ。もちろん主役の法師は水谷八重子さんで、水谷さんだけは素顔なんですが、他はみんな伎楽面、つまり、伎楽と西遊記のコラボレーション。まあ、考えてみると伎楽に登場する人物や怪物は、玄奘三蔵がインドへの旅で辿った国々の人々や魔物たちそのままですよね。例えば西域の王の酔胡王は、法師を酒宴に誘ったり、ヒロインの呉女は、高昌国の妃で呉王と供に法師を歓迎する役回り。烏天狗面の迦楼羅は、この劇では法師の苦難を救う仏菩薩に使える霊鳥で活躍していました。

大祭の日は、玄奘三蔵院の扉は開け放たれて、平山画伯の大西域画と薬師寺僧侶の声明とバックに、幻想的なシルクロードの夢が繰り広げる。でも、玄奘三蔵さんの衣装だけ、なんか鼠小僧みたいで、せっかくの水谷八重子さんなんだから、お宮さんか、お蔦さんの着物姿――というわけにはいかないですよね。

元に戻って、本日の例会のことを書こうと思うんですが、もう締め切りが近づいてきたんで、いきなり最終地に行ってしまいましょう。
「この蛙股池は、秋篠川の源流の池なんです」
そうですか。僕は奈良に住んでいるんですが知らなかったです。それは大きな発見です。真ん中にあやめ池神社が鎮座するこの美しい池は、そんな偉い池だったんですか。
僕たちは今日、秋篠川の岸の薬師寺から垂仁天皇陵や、行基さんの喜光寺や、菅原天満宮を巡り歩いて、のどかな菅原の里と喧騒の第二阪奈道路を越え、はるばるここまで辿りついたんですが、それは秋篠川を辿る旅でもあったわけですね。
そうそう、忘れていましたが、あの神社で僕たちが頂いたお餅と最中、あやめ池神社の神様にも差し上げて頂いたでしょうか。なんでも神社の神様を粗末にすると、あの池に太古の昔からすんでいる竜神が怒って暴れだし、たちまち奈良盆地が水浸しにされてしまう――という話を、あやめ池神社で僕達を歓迎してくれた、翁のような人に聞きましたよ。

僕は思うんです。今日歩いた西の京から菅原の地は、平城京では一番賑やかで、華やかな所だったんじゃないかと――。
秋篠川に沿って、薬師寺、唐招提寺、西大寺の大寺が並び、先進技術者集団の菅原の里が近くにある。学問所であったお寺は大勢の僧侶とともに、伎楽団や楽師団を抱える芸能の根拠でもあり、仏師や建築師、瓦師や金具師や工芸師といった工人達も多数居たはずです。薬師寺の背後の五条山には、彼らの里があって、それは、もしかしたら「がんこ一徹長屋」と呼ばれていたかもしれない。
それらの人々の指導者は半島や、大陸から渡ってきた渡来人です。もっと西方のシルクロードの国からやって来た人々も居たんじゃないでしょうか。伎楽面の大孤王、酔胡王にそっくりの人たちが、天平の貴人、貴婦人の往還する秋篠川の岸辺で、胡旋舞のような異国の舞いを踊っている――、そんなことを想像するのも、長閑な風景の中に古代のロマンを秘める西ノ京の風景のせいでしょう。

写真は玄奘三蔵会大祭の時のものです。